

ふれあい たまこ

「ふれあいたまこ」は多摩湖町福祉協力委員会の広報紙です。
年2回(9月・3月)発行し、多摩湖町の全戸に配布しています。

祝 第60号

令和5年(2023)9月

発行：多摩湖町福祉協力委員会

連絡：東村山市社会福祉協議会
東村山市野口町 1-25-15
(Tel.394-6333)

ご挨拶

引き続き多摩湖町福祉協力委員会地区長を担います木崎朗子です。よろしくお願いいたします。
コロナ禍、地域の様々のイベントが縮小、中止を余儀なくされました。会議・話し合いの場も人数制限の制約から思うように開くことができませんでした。当たり前に出ていたことができないもどかしさ、皆さんも痛感なされたことと思います。今後ウィズコロナの下、交流の場・機会が滞ることなく開催されることを願ってやみません。

見方を変えると制約状況下だからこそ得られた発見もありました。少人数の場を利用しての小さな活動の大切さ、その浸透力です。皆さん、ご存じでしょうか。多摩湖町では週2回、イオン移動販売車が来ています(お知らせコーナー参照)。食料品、日用品の買い物ができます。ちょっとした買い物として大変便利です。多摩湖町福祉協力委員会は移動販売開始当初より普通の買い物に不便を感じている方々が利用してくださるよう情報発信を重ねてきました。



買い物に来た方々と福祉協力員がその場でおしゃべりを楽しむ機会を設けてきました。少人数の方々との交流ですが、町の情報を伝えることができると同時に、町の情報を汲み上げる機会になっています。なによりも買い物に来た方々同士が笑顔を交わすことは心温まるものです。

多摩湖町福祉協力委員会としてはこういったさりげない日常生活での会話・ふれあいを大切に、皆さんに寄り添った活動を続けていきたいと思っています。今は、多摩湖町の他の諸団体とも協力し、移動販売の日時に合わせてお茶会を開催するなどさらなる試みが続けられています。是非ご参加ください。

「多摩湖おしゃべりカフェ」(ふれあいセンター・多摩湖町福祉協力委員会共催)がふれあいセンターで行われています(毎月第4月曜日、2階和室)。こういった多摩湖町井戸端会議にご参加いただき、多くの方が交流を深めてくださればと願っています。今年は久しぶりに長寿のお祝いの品をお届けします。

【お知らせコーナー】

◎ 令和5年度 長寿記念品のお届け
新型コロナウイルスは大分落ちつきを見せて参りました。
東村山市・東村山市社会福祉協議会よりお祝いの挨拶状とお祝いの品をお届けいたします。



◎ イオンフードスタイル小平店移動販売のご案内

- ① 多摩湖町4丁目アパート駐車場
毎週火曜日 10:00~10:20
毎週金曜日 14:40~15:00
(9月29日(金)お茶会を行います)
- ② 多摩湖町1丁目なかよし広場前
毎週火曜日 10:30~10:50
毎週金曜日 15:20~15:40
(10月6日(金)お茶会を行います)

※雨の日も訪問します

ボランティアの窓

「手芸サロンひまわりの活動」



寄附された古い着物を材料にして、小物作りを始めたのが「ひまわり」の誕生です。協力員の中で、手芸を得意とした会員が先生です。用意された手本を参考に、必死に頑張りました。4年が過ぎた頃、社協からサロンにしたらと提案があり「手芸サロンひまわり」と名付け、新たに出発しました。

これを契機としてメンバー誰でもがリーダーとして、腕を磨ける様に工夫もしました。徐々に作品も見映えのするものができる様になり、自信をつける為に作品の販売をする事にしました。多摩湖町桜まつり、多摩湖町ふれあいセンターまつり、サンパルネ雑貨市、氷川神社など。出店したところ、皆さんが喜んで購入して下さいました。その売り上げは、協力員会へ納入し活動の一助としています。時に四中の吹奏楽部へ寄附もしています。

「ひまわり」がこのような活動を、十数年続けられている原動力は、月1回の例会とメンバーの和、地域の方から頂いた古布などです。毎日の生活の中で、作品を使って頂いていると思うと、喜びとなってきます。そして更に自信に繋がってきます。

コロナ禍以前の例会後の茶飲み話は、中々奥の深いものがあり、沢山の人世の師を得られた様にも思います。今では簡単な洋服も作れる様になり、小物作りをきっかけに私にとっては大きな財産となり、これも「ひまわり」のお陰だと感謝しています。

一方、10年を超える「ひまわり」の活動ですが今後の事を考えると、課題も見えてきます。その一つは高齢化です。同世代の居心地の良い集まりですが、先細りの懸念があります。また個人の力量の向上を図ることはとても大切な事ですが、そればかりに目が向いてしまう危惧があります。「ひまわり」の始まりは使われなくなった着物に、再び生命を吹き込むことでした。この初心を忘れずに、齢を重ねていきたいと思う今日この頃です。

(石橋 三枝子)



多摩湖町を歩いてみる シリーズ⑱

村山上貯水池・村山下貯水池（通称多摩湖）

— 多摩湖の工事はこうして進められた その3 —

◎ 材 料 運 搬 路 建 設 工 事

I 村山上貯水池上堰堤（東大和市から西武球場に通じる堰堤）までの状況

(1) 村山貯水池工事の材料運搬用として川越鉄道（現西武鉄道）東村山駅より村山貯水池の上堰堤に至る4里半（約 17, 7 km）の間に重さ 8, 2kg の軌道を敷設、単線にして途中1ヶ所に待避線を設けた。蒸気を動力とする5トンの軽便機関車2両を使用し、一日に 40 立方坪（240m³）の砂利と材料を運搬した。



小作砂利採取場と同傾斜道

(2) 同貯水池建設工事の着手と共に、東村山駅を起点に箱根ヶ崎に通じる鉄道敷設をすべく村山鉄道会社を組織し、川越鉄道株式会社が経営することになった。同会社は進んで東京市の要求を入れ工事材料の運搬に応じ、一部線路敷設を行った。

II 上堰堤築造に使用する諸材料

(1) 青梅線福生駅より横田方面を経て搬入することにして、道路を築造して路上に重さ 5.4 kg の軌条を敷設して諸材料を積載する。運搬台車は貨物自動車や自動機関に牽引し、第一起工案による材料を運搬した。第二起工案による工事用諸材料は都合により川越鉄道東村山駅より上堰堤を通過して搬入した。

(2) 木工事は引込導水路工事に使用する諸材料と共に村山村横田方面より村山貯水池内に搬入し、村山山中に新たに道路を路幅 2 間（3.64m）、延長 1,160 間（4.2km）築造した。

III 資材運搬に関する申請・許可

(1) 大正8年（1919）12月13日旧青梅街道に軽便鉄道軌条の敷設を申請する。同年同月23日に多摩川筋の玉石、砂利、砂の採取許可を東京府に申請する。

(2) 大正9年3月1日青梅鉄道より多摩川河原（小作地域）から青梅鉄道小作駅に至る東京市の専用鉄道の許可を得る。

IV 羽村取水入口から付近から上貯水池までの経路

(1) 東京市は砂利、砂の採取は羽村の取水口の上流付近より、採取許可を得て河原より軽便鉄道を小作駅に引き込んだ。

(2) 更に小作駅から青梅鉄道を利用して福生駅へ。ここから羽村村山線の導水路上まで専用鉄道を敷き運搬している。砂利、砂は全て羽村から運び込まれている。セメントその他資材は東村山駅から専用鉄道で運び込まれている

V 軌道跡は保存されている

(1) 羽村から上貯水池への軌道跡は保存活用されている。武蔵村山市の旧町名の中藤横田地区、赤堀地区は専用鉄道用のトンネルが何か所もある。これは羽村方面から武蔵村山市に入り、新青梅街道を横断し、桜並木の遊歩道を通り、旧青梅街道を横断して、きれいに整備された桜並木を通る。横田トンネル、赤堀トンネル、赤坂トンネルを抜けて上貯水池の西端に通じる。



羽村・村山線軌条跡(赤坂トンネル)

（大熊 鎮成）

「Aさんとの関わり」

Aさんとの出会いは、10年ほど前、私が民生委員になり初めての「緊急連絡先調査」で訪問した時です。Aさんは当時80代、一人暮らしで、私の問いかけに静かに答えてくれました。数日後、近くの店の店主が私の家に来て「Aさんがぶつぶつ文句を言いながら、2時間以上も店にいて困っている」と言うのです。店にかけつけると、奥の方で独り言をつぶやいているAさんを見つけ「店を出て、ゆっくり話しましょう」とAさんの住むマンションまで連れ戻し、階段に座り話を聞くことにしました。



Aさんは「娘が電気代を払ってくれない、電気を止められたら困る。あなた、娘に電話して」と強い口調で話し、携帯を渡されたのです。突然の事に私は困惑しましたが、娘さんは緊急連絡先になっていたもので、その場で連絡を取り、Aさんに「電気代は払ったそうです。もう安心ですね」と伝え、先ほどまで険しかった表情が一変、穏やかな笑顔になり「見ず知らずのあなたに助けて頂いて良かった」と言い、部屋に戻って行かれました。

その後、訪問した際「帰って」とドアをバタンと閉めるときもあれば、自ら外へ出て来て「昨日、手弁当をもって晴海ふ頭まで行って来たのよ」と長く語ってくれる時もあり、私はAさんの精神状態が不安定な事、強い孤独感を抱えている事に気づいていきました。さらに、Aさんの奇行は続き、地域の方のAさんに対する印象は悪くなるばかりでした。私は北部地域包括支援センターと相談し、Aさんに介護認定を受け、サービスの利用を勧めましたが、「私には関係ない」と激怒し、話を聞き入れてはくれません。「為す術なし」の状態が続き、数ヵ月後、Aさんは自宅で体調が悪くなり、入院先の病院で亡くなりました。

Aさんとの関わりは短い間でしたが私が気づき得た事は、噂話に惑わされず自分の目で見て耳で聞いて相手を認識する事、自ら心を開いて語り信頼関係を築く事、拒絶されても足を運ぶ勇氣。これらは民生委員として多くの方と関わる時の大切な学びとなる事だと思います。（清水 敦子）

あとがき

令和4年8月22日、甲子園で全国高校野球大会の決勝戦が仙台育英高校（宮城県）と下関国際高校（山口県）との間で行われた。100年振りに「白河の関（福島県）以北を超えるか」の大舞台であった。遂に「8対1」で仙台育英高校が深紅の優勝旗を東北に持ち帰った。仙台育英の須江航監督の監督優勝インタビューで熱いメッセージを送ってくれた。「宮城の皆様、東北の皆様おめでとうございます。本日悲願の優勝旗を東北地方に持ち帰ることが出来ました。青春ってすごく蜜なので。でもそういうことは全部だめだ、だめだと言われて、活動していてもどこかでストップがかかって、どこかでいつも止まってしまうような苦しい中で。でもあきらめないでやってくれたこと。でもそれをさせてくれたのは僕たちだけでなく全国の高校生の皆がやってくれたことです」と結んだ。この監督の言葉は福祉に係っている福祉協力員にとって、高齢者、身障者、小中高生、ヤングケアラーの対応を推し進める上で「勇氣と感動」を与えてくれたインタビューであった。

（大熊 鎮成）